フィールド（現場）からの風 584

宮田守男

住民が交流できる機会と時間の大切さを知る

2月上旬、白馬村・河津町姉妹都市提携40周年記念事業で企画した「河津桜まつり行・白馬村民号」に丸山俊郎白馬村長と58名の参加者の一員として参加。

白馬村は昭和57年に静岡県河津町、昭和59年に和歌山県太地町と姉妹都市を締結。平成7年にオーストリア・レッヒ、平成14年にドイツ・オーバーヴィーゼンタールと友好都市協定を締結。

「姉妹都市」は外国で始まった交流制度で「Sister City」を訳したものだと言われているが、どちらが「姉」で、どちらが「妹」なのかという上下関係の論議もあり、お互いが対等の「友好都市」として提携する事例が増え、白馬村でも海外の都市とは「友好都市」として提携している。

久しぶりに訪問した河津町の観光事情でお互いが国際的観光都市とし評価される地域状況に「姉妹都市」との呼称が好ましいのか論議するのも大切だと感じてしまう。

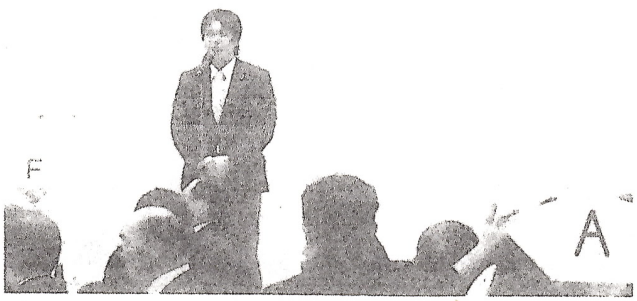
この事業で積極的に行動する丸山村長。大型バスと役場マイクロバスでの交通手段だったが、村長は、応募により当選した村民が乗車する大型バスに乗車。交流会場でも積極的に参加者テーブルで談笑。帰路でも大雪で中央道を中心に大規模に交通網がまひ状況になる中、新東名高速道路で迂回して一時は伊那ICにて通行止めで高速道路から降ろされるが伊那北ICから再び高速道路に。同行した田中克俊総務課長らスタッフの情報収集力に助けられ、バス運転手に感謝の心を込めた拍手もあり、全員忘れられない旅として記憶に残った事だろう。

河津町長の岸重宏さんは姉妹都市の担当者で、私も担当事務をしていたため40年ぶりの再会だった。当時、住民交流から発展した提携だったので「お互いの距離が遠い」「一部の住民の交流で提携して良いのか」などの声が今となっては懐かしい記憶だ。

桜の開花が始まったばかりだったが、5班に分かれたグループごとにガイドが付き歴史を学ぶことができた。1955年2月河津川沿いの冬枯れの雑草の中で芽吹いた桜の苗を見つけて移植した飯田勝美さん、1968年頃からこの桜を増殖した勝又光也さん、その苗を住民が地域全体で育て年間200万人規模のイベントに。一人一人の地域愛を育む大切さを確かめた旅でもあった。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

白馬村・河津町
姉妹都市提携40周年記念交流会



交流会場での白馬村長の挨拶で姉妹都市提携の大切さを参加者は実感する